論　文

レレーヴェルの歴史学

――ポーランド文明史学の始まりに寄せて――

土 谷 直 人

J.Lelewel's Romantic Historiography

TSUCHIYA, Naoto

Abstract

Joachim Lelewel was a scholar and the author of the first modern national history of Poland and its people. He was a historian, a man of letters just like Jules Michelet in France or Gibbon in Great Britain. This article is an attempt to describe the following; his life and his view on society and politics, his concept of General History, his periodization of Polish history, and what he thought were the characteristics of Polish history.

Aiming at perfect objectivity, as a historian, he was still somewhat subjective, and nationalistic in dealing with the history of the Poles, mainly because he was also an ardent statesman at that critical moment of the partitioned Poland.

I don't claim to have given a complete picture of his ideas of history, his historical thoughts and so forth,but this is a small first step to better understand his Romantic Historiography in the context of his day.

1

ヨアヒム・レレーヴェル（Joachim Lelewel 1786-1861）のロマン主義的歴史学の特徴を素描することがこの小論の目的である。

まずはじめに，彼の生涯と時代を簡潔にふりかえっておこう。

彼は，ワルシャワの中流地主・官吏階級の家に生まれた。父のカロルは教育行政の仕事にたずさわっていた。レレーヴェルは，ピヤール会寄宿学校を卒業した後，ヴィルノ大学で高等教育を受けた。在学中は特にゲッチンゲンからやって来たエルネスト・グローデック（Ernest Grodek 1762-1825）に影響を受け，古典文献学や古代史，古典語を一生懸命に学んだ。思想

的には，フランスの哲学者たち，とりわけモンテスキューとヴォルテールの影響を受けた。1808年に卒業後，クシェミェーニェツのリセー［中等学校，現在はウクライナ領になっており，リセーも教育大学になって現存している。筆者は1998年１月にここを訪れた］で講師となり世界史と地理を教える職を得たが，まもなくワルシャワに舞い戻った。彼は1815年に教授職に就き，９年間務めた。まずはじめに1815年から18年までは，ヴィルノ大学一般史（世界史）の助教授を務め，1819年から21年まではワルシャワ大学で書誌学助教授と図書館長を務め，1821年から24年までヴィルノ大学正教授を務めた。

このレレーヴェルの実に多産な時期が，ヴィルノの愛国的若者の追放との関連で，突然中断されてしまう。レレーヴェルは他の３人の教授とともに退職処分に処せられた。若者の活動に有害な影響を与え，大学上層部に敵対行動を取ったという名目であった。

ワルシャワに帰った後，レレーヴェルは歴史研究に精力的に取り組んだ。同時に政治的活動に活発となり，シュラフタの革命家たちに接近し，『愛国協会』に加入した。また彼はより広い世界へ進出し，これらの過程を経て，国会議員に選出されることとなった。

1830－31年の蜂起・反乱の後では，政府の重職を占め，その後アダム・チャルトルィスキ（Adam Czartoryski 1779-1861）を首班とする臨時国民政府に参加した。ここでは，彼は教育・宗教問題副大臣を務めた。同時に彼は，急進的な『愛国クラブ』の会長にもなった。しかし政府部内での孤立，陰謀の網などでがんじがらめとなり，行動の自由がきかず，非常に困難な状況に陥ったので，彼は政府から去らざるをえなくなった。(21，302-330)

実は，この頃は彼の思想が一番先鋭化した時代である。陰謀，内乱によって，この地獄の業火によってポーランドが己の身を焼き焦がし，フェニックスのように再生することを願ったのだ。陰謀，内乱の塵芥の中でこそ，ポーランドという「金」は精練され，鍛錬されるのだ，と。(10，61-62)

この時期，国内での状況とは裏腹に，彼の著作『ポニャトフスキ統治時代のポーランド史』はすでに国際的評価を博することになった。

蜂起・反乱の失敗後，彼は亡命生活を送り，二度と再び祖国に帰ることはなかった。彼はまたロシア・ツァーリ権力により欠席裁判で死刑判決を受けていた。流刑は最初のうちはパリで過ごし，ここで彼はポーランドの防衛・擁護と，ツァーリ専制に対する諸民族の同盟戦争のために広範な出版活動を展開した。彼の仏左翼やヨーロッパ中の革命家との関係は，仏警察とロシア大使館の関心を呼び起こした。それらの圧迫・迫害の下に，彼はパリから地方へ退却せざるをえず，1833年にはフランスを出国せざるをえなかった。そこで彼はブリュッセルへ逃げ，ほとんど死の直前まで滞在した。ここでも彼は精力的な活動を続け，カルボナリ党やフリーメーソン結社にも接近し，また同郷のＳ・ヴォルツェルと『人民の声』を発刊したり，37年には，『亡命ポーランド連盟』を組織して，『オテル・ランベール派』と『ポーランド民主協会派』との統一戦線構築にも尽力した。そして政治活動がうまくできなくなった晩年には，ひたすら学問研究・歴史研究に没頭しており，あまり人と付き合うこともなかったようである。死の数日前に重態の彼はパリに移送され，そこのある医院で亡くなった。(12，30-31)

亡命中に彼の社会観と政治観が形成された。レレーヴェルは，独立ポーランドの再建を国民

の大多数を占める大衆の支持と他の諸民族の解放運動との協力によって成し遂げようと宣言していた陣営の主要なイデオローグのひとりとなった。

また同時に彼は決して一時たりとも学問活動をなおざりにすることなく，世界に知られることとなった。

レレーヴェルの成熟した創作活動の形成期は，まさしく全ヨーロッパ，とりわけポーランドにとっては巨大な変革期にあたっていた。彼が勉学・研究したのは，ナポレオンの大帝国期であり，彼の没落，フランスの敗北を経験したのである。このフランスの成功にポーランド人は期待を大いにかけていたのだが，彼らのポーランド再建の望みもナポレオンの没落とともに露と消えた。

レレーヴェルの教授職時代は，会議王国時代と仏革命後の新しい「融合と調和」の時代と重なっている。激しい闘争，旧体制回帰反対，リベラルな民主的な，民族解放の運動が，この「調和」をゆさぶり，遂には七月革命とヨーロッパ各地での同様な余波を引き起こし，ポーランドでは蜂起・反乱を引き起こした。ガリツィアの1846年がそれである。そして，恐るべきエネルギーの時代がやって来た。ほとんど全ヨーロッパを覆った『諸国民の春』，それと結びついた希望の挫折，クリミア戦争，急進主義から離脱させ，一般的な反動化へとブルジョワ階級を傾斜させた社会革命の亡霊――これらすべての事件がレレーヴェルの生涯の背景を成している。

学問・思想の分野からいえば，啓蒙主義時代からロマン主義時代が彼の生涯をカヴァーしている。経験主義的，合理主義的基礎に支えられた世俗化のスピードを速めた「哲学的」歴史，歴史過程の様々な面に対象を広げ，ヒューマニスティックで，内省的，啓蒙主義者の使う意味で「実用的・プラグマティックな」歴史が，19世紀の前半には，ある一定程度の変更を迫られる。ロマン主義と観念論的哲学の影響は，歴史のより近代化への志向を抹消することはなく，また啓蒙主義もロマン主義も一枚岩的構造を成していたわけではなく，これらは歴史思想の中でお互いに交差していたのである。

18世紀から19世紀への変わり目に，歴史学の分野で生じた変革・変動の方向についてここで考察しておこう。まず第一には，歴史的知識の基礎としての資料の収集，収集技法，批判的分析により多くの配慮がなされたことである。さらに第二に合理主義的啓蒙主義的伝統，つまりユニフォーミズム（統一主義）や図式主義の伝統との論争が始まった。新しい歴史学は，多様性と具体性のなかに歴史認識とその記述を志向し，同時に個々の民族の，とりわけ自民族の独自性，個性を探求しようとした。

19世紀のヨーロッパ人にとってフランス革命はやはり大変な経験であった。このフランス革命，ナポレオン時代，彼の成功と失敗，そしてその後の諸事件の経験・体験は歴史家に次のような点に目を向けさせた。これを列挙してみよう。①広範な大衆の歴史的役割，被支配階級，また彼らの支配階級との闘争，②これらの大衆を動員させ，活発化させている理念，③歴史発展のダイナミズムと様々なその要因，④民族の自然（発生）的，無意識的力の役割，⑤歴史や地方の伝統，とりわけ民族の伝統における反復的継続性，これらすべてが歴史的反省へと歴史家を導き，またこの新しい歴史的問いに対する答えを見つけるべく新しい資料の収集へと向か

わせたのである。

19世紀前半の歴史家を待っていたのはこのような歴史的問いであった。

2

詩人のヤン・チェチョット（Jan Czeczot 1797-1847）はかつてレレーヴェルを「巧みな，勇敢な精力的なマズール人」と呼んだが，この歴史家は様々な偶然の一致から，十数年もの間，青・壮年時代にリトワニア人の間で過ごした。実際中等学校を卒業したのはワルシャワであったが，大学はヴィルノ大学であり，そしてついに，そこで一般史の教授となった。彼は大学にとっては疑いもなく「神意の人」，神の与えたもうた人であった。しかも様々な観点からそう言えるのである。

レレーヴェルは稀にみる歴史的博学と自身の学問概念とを結びつけたので，このことは彼の講義の価値と魅力をいやがうえにも高めた。彼の学問的な革新と教育的情熱も密接に結びついていた。

9年間の大学での一般史講義の中断の後で，彼は1815年に講義をすることになった。レレーヴェルは29歳の新進の教師であった。大学はそもそも9年間一般歴史学の講義がなかった。これはシニャデツキ学長（Jan Sniadecki 1756-1815）の大きなミスのひとつであった。学長は――数学と哲学の専門家であったが――歴史学を年代や人名の暗記ばかりを学生に強要する科目であるから，大学においては無用の学問であると考えていたのである。

レレーヴェルの先任者のトマシュ・フサジェフスキ教授（Tomasz Hussarzewski 1732-1807）が活動している間は，講義は行なわれていたのだが，彼が退職したときに，学長が，ポーランド人の中に適切な候補者を見つけることが難しかったうえに，外国人を招聘することもいやだったので，歴史学の講義は開講されず，とした。

しかしここにレレーヴェルが登場し，彼に世界史がまかされたことにより，当時西欧で目覚ましい発達を遂げつつあった世界史をポーランド・リトワニアの青年が聴講できることになり，これ自体非常に重大な意義を持っていた。

レレーヴェルは前述のように，1815年に助教授の資格で講義を受け持ち，それは1818年まで続いた。その後ワルシャワで大学の図書館長を務めた後，1822年から24年にかけて，今度はヴィルノ大学正教授を務めた。ところが，ここに学生運動が起こり，彼はその責任をとらされる，つまり24年に『フィラレート会」（「愛智会」を意味する学生を中心とする結社）裁判の判決により，ヴィルノから追放され，永久にこの町を去ったのである。

ここで彼の人柄・人となりを紹介しておこう。生き生きとしたジェスチャーと，さして澱みがないというわけではない，いわばとつとつとした語り口の，小柄でやせ形の男は，まもなく大学の偶像・アイドルとなった。若者は群れをなして彼の講義に通った。彼の講義はろうそくの下で始まり，150人にも及ぶ――当時としては大変多い――学生が，西欧古代史，ヨーロッパ文明の揺籃時代，地中海世界の人々や国家，とりわけレレーヴェルの好きなテーマである，古代ギリシアについての講義を聴きにやって来たので，教師自身驚いたという。たとえば第一

印象を父親に彼はこう語っている。「わたしの聴講生たちが，どうして講義をこんなにおもしろがってくれるのか合点がいきません。……ひどいぬかるみはあるし，陰気な時期だし，いまだ大寒ではないけれど耐え難く寒くて湿気があるし，それにもかかわらず暗い時間だというのに150かそれ以上の学生がやって来るのですからね……」。

学生たちは，大学内でこそまったく目新しい科目であったが，すでに啓蒙時代に持ち込まれたこの学問の重要な分野を興味深く思ったに違いない。

啓蒙時代までのヨーロッパ史学を簡単に要約すると，①聖書中心主義，②ギリシア・ローマ中心主義，③人類文化の揺籃はヨーロッパであるというヨーロッパ中心説，から成り立っていた。

この思い上がった西欧中心主義，歴史解釈の人類学的，人口学的，歴史学的着想を嘲笑批判したのは，合理主義者たち，わけてもヴォルテールであった。彼にとっては，歴史を小さなヨーロッパの「破片」に閉じ込めておくことはひどくせせこましい縄張り主義的で，何と思い上がりのはなはだしいものと思われたことであろう。彼の『世界史，あるいは風俗習慣と国民精神概説』（1756）で，彼は新しい歴史的地平空間と新しい民族を示しながら，これほど誤って急造された世界の壁を押し広げようと努力したのだ。ヴォルテールはまず第一に東方世界，アジアの諸民族，インド，中国――そして彼らの文明と宗教の歴史に注目するように呼びかけた。モンテスキューの『ペルシア人の手紙』やヴォルテールの『哲学書簡』（1734）では，しばしばペルシアや中国の習慣や人々の性質や性格がフランス人のそれらより優れていることが述べられている。あるいはまた，モンテーニュも新大陸の原住民についてこう書いている。「そこには野蛮なものは何もないように思う。もっとも，誰でも自分の習慣にないものを野蛮と呼ぶなら話は別である。まったく，われわれは自分たちが住んでいる国の考え方や習慣の実例と観念以外には真理と理性の尺度をもたないように思われる」。（『エセー』第１巻，第31章，原二郎訳）

ヴォルテールが踏み込んだこの領域は，必ずしも最終的に確かな歴史的資料を利用しているわけではないが，それでも論争的な情熱，パッションに満たされている。また彼の本は，東方世界の秘密をヨーロッパ人の目からうろこの落ちるようにさせた，多くの記録者（主として宣教師）の書物を読んだ結果でき上がっているのである。彼は実際ベネディクト会士ドン・カルメの書庫を利用して『世界史』の完成に努めていた。ついでながら，日本の事情に関しては，エンゲルベルト・ケンペルの日本論が，ヴォルテールやディドロを中心とする百科全書派の著述を通じて，その後のヨーロッパ人の日本観に大きな影響を与えた。

今は過ぎ去り，たとえ忘れ去られていようとも，かつては素晴らしかった文化を不断に追求し，東洋に熱中することの裏にはふたつのことが隠れていた。ひとつは，真に普遍的な歴史の新しい統合を創設すること。もうひとつは文明期の歴史的発展過程を復元しようという熱意であった。この歴史的発展過程の復元こそ遂に聖書の権威から解放された啓蒙時代の人々を熱中させたのである。

史実の批判的分析に基づいた歴史の総合，ヨーロッパ中心主義にとってかわる真の普遍主義はヴォルテール時代には科学としての歴史のこのうえない最上の達成となった。この時期の歴

史哲学の成果には，たとえばヘルダー（Johann G.Herder 1744-1803）の『人類史哲学省察』などがある。ヘルダーもまた，古代文化および社会生活の開始の形成においてアジアに際立った役割と地位を認めたのである。

3

このように西欧世界においては，歴史学・歴史哲学の分野での発展は目覚ましいものがあったのであるが，ポーランドではすべてが旧態依然としていた。一般史（普遍史，世界史）の学問的な研究は全然行なわれていなかった。大学レベルでのこの科目の教育は，まだ体裁を整えていなかった。レレーヴェルの教師であったフサジェフスキが歴史学の分野で，どのような史観を広めていたかはわからない。そもそもフサジェフスキの経歴・業績自体よくわかっていないからである。しかしいずれにせよ，彼が一般史の分野で啓蒙主義時代の新事実・新発見の影響を受けていたことはどうやら確かのようである。なぜなら彼は死の直前になって自分の手稿を全部焼いてしまっていたからである。恐らく自分の教会での高い地位を危機に陥れたくなかったからであろう。ここにも教会権力＝聖書主義と，研究・学問の真実を追求しようとする探究心との心の葛藤・せめぎ合いがみてとれる。ポーランドには信仰心の篤い人が多いから，学者の信仰心と学問的結論の葛藤は日本より大きかったのではないであろうか。あのミコワイ・コペルニクに象徴的に表れていたように。

ともかくフサジェフスキは大部の本を収集していたし，また深く持続的なレレーヴェルの愛着・尊敬を受けていたことがわかっている。彼の学者としての質に関して最も称賛的な意見もあることはあるのだが，フサジェフスキの学問的影響は最低限度にとどまっていると言ってよい。彼は学問的論文をひとつも印刷・公表しなかったし，大学を超えた教育活動もしなかったし，年配の老人にとっては疑いもなく苦労の多かった大学の講義を「小声で，ぼそぼそと」やっていたのである。それにもかかわらず，レレーヴェルの前で一般史の最高度の講義を見せてくれていたのは，まさにほかならぬフサジェフスキであり，しかもこれはヴィルノに限ったことではなかった。

つまりワルシャワその他の地域にも人材は払底していたのである。ワルシャワでの歴史学の講座を担当していたのはフェリクス・ベントコフスキ（Feliks Bentkowski 1781-1852）であり，彼はポーランドで初めてポーランド文学史を出版した人として有名であるが，しかし歴史学研究者としては，ほとんどゼロに等しかった。というのは「人類」の発生に関するフランス人歴史家ボシュエ（J.B. Bossuet 1627-1704）の見解を無批判的に再生していたからである。たとえば1820年代になっても，ベントコフスキの講義においては聖書の大洪水の話がされていた。啓蒙主義時代の輝かしい歴史学の発展はまったくポーランドをすり抜けていたように思われる。

このような状況下に突然レレーヴェルが登場した。一般史（世界史）の熱烈な唱導者，ファナチック，新思想の啓示者が。学生たちは，このレレーヴェルに三人の偉大なイギリス史家——ギボン（E. Gibbon 1737-94），ヒューム（D. Hume 1711-76），ロバートソン（W. Robert-

son 1721-93）――の体現者を見た。この三人やヴォルテールは，あらゆる事件を因果関係によって解釈し，与えられた現実を彼岸的観念によって逸脱させることを拒絶した点は批判的にも優れていた，と評価されている。西欧で長い期間にわたって準備されていたこの歴史観における革命を起こすために，彼は真に巨人のような努力に取りかかった。

このような状況から，レレーヴェルの業績の範囲は多岐にわたるが，簡単にここで要約しておく。

①資料収集――この時期，すでにザウスキ兄弟ほかによる資料収集も開始されていたが，まだ相変わらず歴史資料は不足していた。ポーランドは三国分割支配時代であったから，この収集は日本人の想像以上に困難な作業であった。

②史実と伝説を厳密に区分する仕事――「これまでおとぎ話を国中にばらまいていた」・テオドル・ヴァガ（Teodor Waga）の大変評判のよかった歴史教科書を増刷することをレレーヴェルの意見によって取りやめた。この結果レレーヴェルはこの教科書の改訂，およびおとぎ話とアポカリプシス的お話を解消することに取りかかった。またニェムツェーヴィッチ（J.U. Niemcewicz 1757-1841）の『歴史歌謡』（1816年出版）の書評において，この詩人・歴史家の不正確性を攻撃した。ニェムツェーヴィッチは，ポーランド王侯の系譜の中に伝説的なカジミェシュ・ムニフを含めていたのである。レレーヴェルはポーランド史からあらゆるゴミ，あらゆる思いつきやおとぎ話を掃除するホウキが是非とも必要だと考えていた。彼は自分自身で厳密な史実と多方面の博学に基づいたポーランド史を書きたいと念願していた。父親に向かって書いた一節にこう書いている。「私の仕事は，古めかしいニェムツェーヴィッチ流の抜き書き読本やホラではなく，歌曲でも詩でもなく，絵画・肖像画でもないのです」。彼は歴史とたわむれたくはなかったし，人々が気に入るかどうかには関心がなかった。彼はただ歴史記述の最大限の厳密性を達成し，学問的規範を確立したかったのであり，若者にとって明晰で，直接的，容易で，澱みなく読め，簡潔な書物を書き表したかっただけである。（13，213-214）

③史実尊重主義歴史記述者および科学としての歴史の理論的基礎（歴史研究の対象と時期，歴史家の役割と課題）を確定する歴史学方法論者としての仕事――この史学方法論者としての役割は，今までポーランドには見られなかったものである。彼は，とりわけこの③の役割に興味を持っていたので，大学教師に就任してからの最初の著作は次のものであった。『歴史家』（1815），『歴史の基本的知識の必要について』（1817），『歴史家はどうあるべきか』（1818）。

④科学研究の現状とみあった歴史知識を若者に伝達する普及者としての仕事――教授の義務と教育者としての仕事から次のような著作が生まれた。主として教科書としての性格を持ったものである。『古代史』（1818），『古代インド史』（1820）。これらの二作品は，学生教育用教科書であるとともに，また彼の大学講義科目――一般史（世界史）概説の基礎ともなるべきものであった。これらの著作では，「人類」の発生をたどりつつ，厳密に事実によって反論させながら聖書の権威をしりぞけ，また歴史を動かす原動力としてのボシュエ流の「神意説」，「摂理説」とは異なったものを跡づけ，突き止めようと試みるものであった。

4

以上の点がレレーヴェルのポーランド歴史学に対する貢献といってよい諸点であろう。彼はいかなる時であろうとも，自己の科学的合理主義に忠実であろうとした。この当時のロシア支配下のポーランドにおいては，ロシアの文部官僚が，ヴィルノ大学の講義にロシアに不都合な部分がありはしないかと恐れて，講義要項［プロスペクト――現在のシラバスの簡略なものであろうか］をチェックしていたのであるが，このヴィルノ大学の御目付役はこの当時レオンツィウシュ・マグニツキ（Leoncjusz Magnicki 1778-1844）であった。そしてこのマグニツキは，レレーヴェルの講義に，ロシア皇帝に対する不実性をやはり嗅ぎつけたのである。それはただ講義要項に救世主の到来が言及されていない，ということであったが。

レレーヴェルは単にポーランドのヴォルテール，すなわち合理主義的歴史家であっただけではない。彼はまた同時に歴史哲学者であった。彼は歴史世界を支配している法則を研究し，一見調和なき事件の裏に隠れている力を追求し，歴史発展の意義と目的に熱中していた。まさにこの歴史哲学者としての情熱がレレーヴェルを一般史（普遍史，世界史）へと向けさせたのである。何故なら，ただ大所高所からみた概観においてのみ，一般的総合（ジンテーゼ）において，また歴史的比較において，人類発展の一般法則や普遍的原理を認識し把握できるからである。

レレーヴェルはこう書いている。「ヨーロッパのいかなる片隅の歴史であろうとも，一般史の知識なしで，それへの参照なくして取り扱うことはできない。すでに何世紀も前から国々や民族の運命を決定してきたのは，住民や支配層の不屈の勇敢さや錯誤だけではなく，むしろ一般的動き（ruch powszechny）や文化の変動である」。歴史哲学において，同様な考え方をした人にヘルダーがおり，彼にとっては，「全体がすべてである」という原理の発見は，最大の知的体験のひとつとなったのである。

「個々の事件」のより深い意味と目的もレレーヴェルは考慮に入れていた。彼はこう断言している。「歴史研究の本質は，もし無関心の目で見たなら，目のとどかない深淵と思われる，あらゆる人間を取り巻く関連状況の解決にある」。そしてこの深淵の意味を研究するためには，真の歴史家の特質である，例の「高度に哲学的な物の見方，哲学観」を必要とする。こうしてレレーヴェルは彼以前の歴史「記述」を深く軽蔑していた。ポーランドで主流をなしていた考えは，歴史とは「記述され，繰り返された話の年々を順序よく並べ，戦争や戦い，大小の陰謀……を集めること」という考えであったからである。

歴史のこのような扱い方を最もよく体現していたのは啓蒙主義的プラグマティズムであり，この実用主義は史実の原因を探ることに限定していた。しかもポーランドではふつう最も単純な役割，いわゆる「人物実用主義」に限定されていた。すなわち歴史的事件のカギを人物の性格，王侯や偉大な司令官の長所や短所に求めていたわけである。

実用主義的歴史家とは基本的に語り手であり，レレーヴェル流にいうならば「おとぎ話の語り手」であり，彼らの課題とは事件を語り，登場人物たちの性格付けをすることであった。ち

ょうどヴォルテールが『シャルル十二世時代』で行なったように，哲学する歴史家は，このヴォルテールの仕事の成果を見，また語り手の人物を見て，ただ寛容なる微笑をするだけであった。彼にとってはこれは歴史の前史・序幕であって，その価値はただ事実を登録したことにあったのである。(2，429-430)

こうしてレレーヴェルは，ヴォルテール型の歴史家も模範とすることができなかったのである。

5

それではロマン主義的歴史主義とは何であったのか。ロマン主義的歴史主義は実際，すでに必然性というようなカテゴリーを持ち，また国家の運命を支配している「神の見えざる手」の存在を疑っていた18世紀の歴史哲学的思弁的傾向の中に哲学する先行者を持っていた。このゆえに18世紀末に――この時期の先駆者はまたしてもモンテスキューであったが――しばしば，偉大な文化と諸民族の「偉大さ・栄光と没落の原因」，それらの成長，開花と堕落の歴史を研究した仕事がしばしば発表された。後世のダニレフスキーやシュペングラー，トインビーの先駆者がすでに出現し始めていた。

このタイプの研究の最も生産的な分野は古代史であり，とりわけローマ史であった。何と言ってもローマ史は興隆と没落の最も典型的な線を描いているからである。こうしてモンテスキュー（「ローマ盛衰原因論」1748）と並んで，ギボンが『ローマ帝国衰亡史」(1776-88）を書き，ローマの強大さを条件づけた原因を研究し，また帝国を野蛮人の足元へ投げ出した原因を究めようとしたのである。ボシュエは，神の意志と企図に歴史上の事件の原因を求めていたので，上記のような問題の立て方をまったくしなかった。ボシュエにとっては，すでに頭から「世界の計画」が決定されており，この計画においては，すべてが最終的目的――キリスト教の勝利に奉仕することになっているのである。

このような歴史発展観は啓蒙主義思想家を満足させなかった。彼らはかなり合理主義的な考え方をしていたし，また経験主義的で，自然主義的な力を信じていたからである。こうして彼らは実に情熱的に，彼らを魅了していたローマ史を奥深く研究していった。彼らはこの歴史の中に，歴史という巨大な機械を動かしている esprit general，つまり「一般精神，一般原則」を読み取ろうとしていたのである。たとえば，ある時期，モンテスキューは，このような主要な原因に，気候・風土を挙げ，それに従属するものとして民族性や政治形態を挙げた。何か秘密の力の存在，誰かある「歴史の天才」の存在は，モンテスキューにとっては，極端な歴史的宿命論を認めることになってしまう。

宿命論を拒否するためには，まだよく知られていない歴史的必然である「自然法則」に逃げ込むか，あるいは「神の意志」への信仰を続ける必要があった。18世紀に豊かに発達した哲学的叙情詩は，普遍的意味と人生の意義を世界の神による指導と人間の神への漸進的接近のなかにみていた。たとえばロシアでは，ロモノーソフが『夕の瞑想』(1743）のなかで「神の偉大さについて」唱えている。

「自然法，自然法則」を重視する立場は，歴史的プロセスの真に客観的な性格を抹消した。人間の理性と意志が「自然法」の信奉者にとって歴史発展の原動力であった。ちょうどこの時期，コンドルセが『人間精神発達史』で人類史を，その文化や文明を上昇史観で描き出し，またルソーは逆に，それまでの歴史を，原始平等の理想を汚し，自由がより深く堕落し，低迷していく人類下降史観と捉えたのであった。

ヴォルネイ（C.F. Volney 1757-1820）は，18世紀末から19世紀にかけて『廃墟，諸民族の革命論評』という本がポーランドで大変人気を博した作家であり，彼の作品は暴君政治に対する憎悪に満ちているが，彼は不断に増大しつつある迫害や人類の敵の活動を基準にした人類史の時代区分を試みた。

彼の描いた人類の未来社会は何と楽観に満ちていたことであろう。人間と公民としての権利が勝利し，またフランス革命の勝利によって，人類の未来は流血なしで光り輝く。まさにこの革命によって暴君政治は終結し，すべての人々は自由と平等を求め，聖なる盟約（コンコルド）のうちにひとつになることを願うのだ。実際いまだひと握りの暴君の召し使いたちは人民を無知蒙昧に押し止めようとするが，しかし人民はすでに啓蒙され，自己の権利を理解し，何を欲しているかを知っている……。

ヴォルネイの結論からは，人間の理性と意志が，人類を最底辺の底から引き上げ，進歩の素晴らしい未来像を示す，という楽観的な信念が流れている。これは歴史的必然という観念を知らない『自然法』がヴォルネイ流の人々に与えた楽観論である。

こうしてロマン主義的歴史哲学は『自然法』の旗の下に起こった歴史解釈を批判的に取り扱った。しかし，法則や必然性に対する，あらゆる思案・熟考は貴重な価値と認められた。こうしてそれは，モンテスキューをはじめとする啓蒙主義歴史哲学と，ギボンやヒューム，ロバートソンをはじめとする18世紀歴史哲学が，新しく生まれつつあったロマン主義歴史学に譲渡した，かけがえのない贈り物だったのである。たとえ精密に定式化されていなくとも，たとえ人間生活への宿命論的な理解に汚染されていると酷評されても，歴史の本源的・張本の力としての必然性に関する思索は，後に発展の客観的プロセスと呼ばれることになった現象の本質を捉えたのであった。

6

柴田治三郎によれば，19世紀の「およそ科学的な歴史学の新しい研究方向を決定した著作は，ニーブールの『ローマ史』(1811-32）とランケの『ゲルマンおよびラテン諸民族の歴史。(付録）近代歴史家批判のために』(1824）である」(柴田治三郎「歴史家ブルクハルトの人と思想」，24，29-30)。ニーブールは，原資料そのものの信憑性の検討を良くし，またランケは，その方法を中世および近世の歴史資料に応用し，こうして「歴史的批判的方法」が確立されたと言われる。こうした19世紀歴史学の当面する課題にレレーヴェルはどんな貢献を成したのであろうか。

レレーヴェルにとっては，事件の奥に必然性を探求することは，歴史の哲学的見方の基本原

則となっていた。歴史的事件や，人類の運命にまず第一に彼は，歴史を支配している一般法則（普遍的法則）の発現を見た。「運命であろうが，偶然であろうが，あるいは自然の作用と名付けようが，それとも神の意志と認めようが，とにかく超人間的発動があるのだ。それはほんの一瞬たりとも休まず，また一瞬の一撃によって人間の活動を開始させもし，持続的圧力によってこの活動の方向を決定するのだ」。

歴史家の仕事とは，こうして，まさに状況がどのようなものであり，どのような結果を生むであろうかを立証することであった。このような歴史は，予言に逃避せずに過去・現在・未来を語るのである。すなわち，今日という日，同時代の歴史的現実を理解可能とし，明日，事実が展開していく方向を予見可能にするのである。歴史はしたがって活動的な人間の手に不可欠の，一種の羅針盤なのであった。これこそ，歴史の新しい社会的使命である。

歴史哲学を見抜くことは同時に自己と自分の時代を理解することであり，自分の属する時代感覚を磨くことである。新しく生まれつつある歴史観は，このように，真に具体的，ヒューマニスティックで，実用的であった。ヴィルノ大学で教授活動を始めたレレーヴェルはこうした歴史観を身につけていた。

家族に宛てた手紙の中で，教育の仕事が彼を苦しめている，と訴えている。彼の興味関心はまず第一に自分の学問的創造力と自分の研究自体にあった。レレーヴェルは知識を求めることに関しては同僚のなかでも抜きん出た存在であったし，同時代の歴史文献を読むことに関しては並ぶものがなかった。

教育という骨の折れる仕事はしかしながら一定のプラスもあった。果実がなかったわけではない。反対に，教育の成果同様，若い学生と接することに素晴らしい結果が生まれた。まもなくレレーヴェルは若者のアイドルになったのである。（レレーヴェルがヴィルノ大学で教え始めた時，彼は29歳，教え子の，たとえばチェチョットは18歳，ミツキェーヴィッチは16歳というように，両者の年齢がかけ離れていなかったことも，レレーヴェルの人気のあった理由のひとつであろう。）疑いもなく彼は幅広い知識や途方もない博学多識で学生たちに刺激を与えたであろう。とりわけ，彼らに古臭い学問知識を与えず，最も新鮮なデータの，よく自身によって考え抜かれ，「火をもって」語られた思索の跡が学生の心を捉えたのであった。

レレーヴェルの一般史（世界史）講義は，過去と遺跡，「古代」の魅力に対する関心が増大する時期に当たっていた。レレーヴェルの聴講生たちはこの「古代」を著しく愛国的精神において解釈し，ポーランドの同時代人にとってのその養育的価値を最も高く評価した。この愛国的で倫理的な過去崇拝は，彼らを特に鋭敏な聴講生とさせた。

そもそも彼らは歴史に対する関心を血肉と化していた。レレーヴェルが一般史について語っていた時も，彼らが主として関心を持っていたのは自国の過去であった。たとえ彼ら自身が関連に気づかなかったとしても，レレーヴェルがまもなく彼らに歴史の比較・相対的見方を教え，彼らに一般史の知識なしでは「いかなるヨーロッパの片隅」も理解できないことを確信させたであろう。彼は学生たちに，歴史にはある一定の法則や必然性が作用しており，いかなる国民といえども逃れることはできないことを意識させた。彼は，歴史を動かしている「隠れた原動力」について語り，真の歴史家をつくる「哲学的」見方がどこにあるかを説いた。彼は恐らく

当時考えていたことのすべて，彼に興味を持たせたことのすべて，雑誌『歴史』やヴィルノの出版界で出版された理論雑誌に書いたことを学生の前で講じたのであろう。しかもこの上ない熱意を持って。

学生の反応は非常によかった。このことは信じがたいほどの学生出席率によってうかがうことができる。彼の初講義からして出席者数は多数であった。実に魅力的な，比類なきレレーヴェル流の叙述表現を伴った，一般史という講義課目自体が学生を引きつけた。一般史講義はこうして彼らの青春時代の最大の知的体験のひとつとなった。

これらの証拠となるものには，レレーヴェルの講義の学生による筆記ノートがあり，これらのノートが，いかに良心的でかつ自発的であるかがわかる。

フィロマート会（愛智会）の会員たちの手紙には，しばしばレレーヴェルの一般史講義が話題となっていた程である。

7

それではここでレレーヴェルの一般史の概念の特徴について少しばかり考察してみよう。

まず第一に，レレーヴェルは歴史の普遍主義を非常に広範囲に理解していた。たとえば，①一般史（普遍史，全世界史）は，ただ単に偉大な強国，何がしかの特定な種族や選ばれた民族だけではなく，あらゆる時代のあらゆる国々や国民を含まなければならない，とした。この観点から，中世や近世の一部の人々が考えていたような，四つの帝国の周辺にのみ固まっていた「普遍史」の概念を拒絶したばかりではなく，たとえばヘーゲルの行なったような，諸国民を歴史的民族と非歴史的な民族に区分することも絶対に容認しなかった。（ヘーゲルは，スラヴ民族を非歴史的な民族であると分類していた。）②この普遍主義は，特権的，支配階級の活動の紹介にのみ限ることはない，とされた。これは文化史や，被支配階級，一般国民の役割に対する研究の一般的方向づけに適応されるものである。これらの社会的に恵まれない階級は，レレーヴェルによれば，静かだが活気に富んだ力であり，この力に不断に民族や国家の運命がかかっているからである。③レレーヴェルの歴史方法論の一般原則に合致して，この普遍主義は，政治と文化がお互いに結合した状況で考慮されねばならない。

要約すれば，普遍史の目的・対象とは，「この地球上で生まれ変わりつつあるすべての人類」ということである。こうして歴史家はお互いを結びつけている結び目を探究し，歴史家＝哲学者は人類の全大衆の歴史における偉大な真実を深く掘り下げなければならないのである。ここにこそ，この分野にこそ，歴史家には特別な史観，歴史哲学が必要なのである。(2，446)

以上で明白なように，レレーヴェルの一般史の特徴は，一言で

①全世界史を取り扱う

②全階級・全階層の人々を取り扱う

③政治史と文化史の密接な関連

④歴史哲学の必要性の強調

とまとめることができよう。(①といっても，残念ながらアジアに対する関心は，古代インド，

と地中海周辺を中心としたものに限られている。）（13，66）

こうした理論的原則に則して，レレーヴェルは「文明世界」の周辺部を広く考慮に入れ西欧や強国にのみ限らず，非圧迫階級の解放運動や，人類の進歩に寄与する要因，人類の進歩を押し止めようとする要因，統合や分裂要因，拮抗する文化，それに世界における政治的関連などに注目した。一般史の全体像においては，世界で起こっていることすべてを登録・記載することに関心があったのではなく，全体性に対する意義の観点から彼は選択した。

こうした選択的態度をしばしば彼が導入した分野は，過去に人間の運命に対して最も強く作用したふたつの要因，すなわち宗教と政治の分野であった。このふたつの要因はまた普通，一般史を特別な時期に分割する判断基準ともなったのである。

8

ここで，まず彼によるポーランド史の時代区分を覗き，彼の自国観の基礎を垣間見てみよう。彼は，すでに28歳にして出版した『ステファン・バトールイ治世末までのポーランド史』で次のような時代区分の設定を行なっている。（13，197-199）

①征服するポーランド（専制政治下のポーランド）	890-1140
②マグナート（上層貴族）支配下のポーランド	1140-1333
③シュラフタ民主制下で繁栄するポーランド	1333-1588
④衰退するポーランド	1588-1795
⑤蘇生し，復活するポーランド	1795-現在

これらの時代区分の内で彼が最も評価しているのは，もちろん第三の時代であり，それはこの時代にシュラフタがポーランドの最も尊い国民性である，国民の気風（narodowość）と市民精神（obywatelstwo）をつくり上げたからである。彼は，歴史の一般的発展過程に沿うよりも，ポーランド史はやや特殊な個性を持った歴史を歩むと考え，ポーランド史の過去の偉大さを賛美し，とりわけシュラフタ民主制を高く評価していた。

次に，ポーランド歴史学の最大の問題について，レレーヴェルがどのように考えていたかを考察してみよう。

ポーランドは何故没落し，近隣三国に分割されたのか，という問題はポーランド歴史学最大の難問である。彼は，『スペインとポーランドの対比研究』をはじめとする，様々な論文や時局発言で，このことに触れている。

彼のポーランド滅亡原因論の基本的考え方は，次のようになるだろう。

①危険極まりない政体

②無政府状態

③ポーランド士族共和国を救ったかもしれぬ，発達したブルジョワ＝町人階級に支えられた強力な君主権力の不在

彼の観念の基本テーゼによれば，ポーランドの「古来からの原則，祖法」ではなく，それらの「横領，ねじまげ」こそがポーランドの没落を導いたのである。

彼のスラヴ観と非スラヴ観（西欧観）について，彼の言葉を直接引用してみよう。彼は1848年に亡命先からこう書いている。「わが生涯のうちに何回，私はスラヴ民族の過去を凝視したことであろう。スラヴ固有のなつかしい自然力が私を勇気づけたものだ。あのいわゆる文明化された西欧において今日ようやく持ち上がり探究されているものがひとつならず，われらが輝かしい東方のスラヴ族のもとでは何世紀にもわたって所有するところとなっていたのだ」。(5，203)

ここにはっきりと書かれていることは，価値観の逆転といっても良いであろう。「先進西欧」対「後進東欧」の図式がいとも簡単にひっくり返されているのである。またこうも書いている。

「世界はポーランドの過去の自然の姿，平等，あらゆる拒否権，上司選挙性，代表民主性(代議権力性)，無料指示性等へと突進している。どこか西欧でうまれそうな民主主義を夢みることはやめよう，そうではなくむしろ，かつて存在し，おそらくより生命力に富んだ民権(guminowładztwo）に命を与えよう」。(4，47)

古きよきスラヴの共同体（郡）の自治を良きとし，様々の良きものはすでに東方スラヴ世界にあったと考え，ポーランドの進むべき道は，単なる西欧の猿まねの民主主義ではなく，古来の民権への道なのだ，と述べているあたりは，レレーヴェルもやはり「スラヴ派」のひとりだと実感されよう。実際，ロシア史家として名高いマーチン・マリアは，レレーヴェルを評価して，「かつてあらゆるゲルマンとスラヴに共通して存在していた民衆共同体がロシアのミールやオープシチナにのみ保存され，こうしてツァーリ帝国に対して将来の民主的な発展がこの共同体ゆえに保証される，と初めて唱えたのはレレーヴェルであった」と，述べている。(22，138）ロシアの西欧派のゲルツェンやグラノフスキイ，それにスラヴ派の歴史学者，たとえばポゴージンなどと比較してみるのも興味深いことであろう。実際彼のポーランド中世・近世史観をめぐっても，やや，スラヴ固有的なものを良しとし，外国的色彩をおびたものを不可とする姿勢がみてとれる。たとえば，王侯は，国民の意志と時代精神に合致した活動をした時は真の指導者，いや英雄にさえなることができると書いた後で，ヤギェウォー朝時代はそうであったが，王権と国民の間に不信の念を植え付けたステファン・バトールィ王（ハンガリー・トランシルバニア出身）時代や，トルコとの戦争に勝利しても，国王個人の利害関心と国民のそれとが一致しなかったヴァーザ王（スウェーデン出身）時代はそうではなかったと，評価を低めているのが注目される。レレーヴェルの文明史学を理解するためのアルファでありオメガである「民権（guminowładztwo)」については，更なる論文を必要とするであろう。

9

ポーランドのロマン主義詩人ユリウシュ・スウォヴァツキは，『コルディアン』の『幕開前』で，19世紀に活躍する政治家たちをサタンたちが一生懸命に大釜から作り上げる，という場面で，レレーヴェルとおぼしき人物を次のように描いている。

サタン　　この青白い姿を見よ，
　　大釜のどろどろからもう半分生まれた

ほおはこそげ落ち，目の隈は真っ黒
口は相変わらず満足せぬ思想を語り，
永遠に書物と魂に心を痛め，
曲がった二本足でよろめいている
まるで不確かな政体のように。
あ，しゃべりたがっているぞ，世界に何を蒔こう
というのか，聞いてみようぜ。……

像　大釜から頭を出しながら

王がいる時の方がいいかね，それともいない時
の方がいいかね。

サタン　謎かけするスフィンクスなぞ
消え失せろ！
悪魔自身だって解けやしない，
そんなものは，形式主義者のところで
種を蒔いておくれ，
歴史の事件に関したことなぞは
どうか閣僚席から
ナイルの血の豊饒な氾濫で
倒れた列柱の土台から
ヒエログリフ様式でおしゃべりしておくれ。(27，141)

ここには，四十代半ばの，チャルトルィスキの臨時政府に加わったレレーヴェルの揶揄された，滑稽じみた「像」が取り沙汰されているが，この節では，後世のポーランド人が彼をどのように評価してきたかを探ってみよう。

まず，大学生の反響は，一応前述したが，少しばかり付け加えておこう。つまり，彼の教授ぶりや講義内容に熱狂的な反応をみせた者には，大学生ばかりではなく，通りがかりの老人も含めた聴講生もいたのである。いやそればかりか，そこには女性たちもいた。19世紀初頭のポーランドでは，勿論，女性たちに大学の講義室の座席に座る権利はなかったのではあるが。

聴講生のひとりであるドメイコは，「誰ひとり例外なく皆レレーヴェルを好んでいた」と書いているし，またチェチョットは同僚に，彼の第一回目の講義は，「シニャデツキ兄弟教授(物理，化学，数学，哲学などを教えた当時のヴィルノ大学の有名教授――土谷）を圧倒し，この世に存在するものすべてをぶっ飛ばしちゃったよ」と語っている。また，もうひとりのダニウォーヴィチは，「レレーヴェルの名前は，本当に感受性の強い，多感な，優美な心の人から，忘れられることはないであろう」と，書いている。

ここでミツキェーヴィッチの描いたレレーヴェル像を見てみよう。ヴィルノ大学の教授たちのうちで最も強い影響を与えたのはレレーヴェルであった。冠を被った一団の教授連の居並ぶなかを，ひょろひょろの，猫背のレレーヴェルが学長席に就いた時，ミツキェーヴィッチによって書かれた，この偉大な歴史家の帰還を祝った詩が町中を駆け巡った。「レレーヴェルに」と名付けられたこの詩は，若者の崇拝の対象たる「王冠をかむれる教授」を歓迎していたのである。レレーヴェルは，決して美しいとは言えないローマ鼻，調和の取れていない金髪をし，何か遠い空間の霞をじっと見つめているような目をしていたが，インテリのウイットに富む学生から大層好かれていた。このようなレレーヴェルに対し，ミツキェーヴィッチは生涯の最後まで敬愛の念を抱いていた。ミツキェーヴィッチがレレーヴェルを高く評価したのは，後者の博学多識，祖国愛，歴史理論と方法論に明るいこと，古代史研究に熱心であったことなどであった。(9，93-100)

このように，レレーヴェルは，わざと人気を得ようとしたわけではないが，ともあれ彼の親切心によって，学生の研究に対する心のこもった配慮によって，そして時には，自分の貧窮にもかかわらず，学生の日常的物質生活に対する配慮によって，また高位顕官に対する堂々とした態度，独立自尊の態度，威厳によってばかりではなく，何よりもまず大学の講義によって若い学生たちの心を摑んだのであった。そう，彼は作為なき，天性のアジテーターであったのである。

しかし，現実の政治世界に入ったレレーヴェルの評価は芳しいものではない。実際，政治の緊急事態の場面では，誰が指揮を取っても，前後左右からいろいろ文句がでるのは致し方ないのであるが。

たとえば，評論家のモフナッツキは，彼をフクロウになぞらえている。「歴史のより暗く，より遠い時代であればあるほど，彼はよく見えるが，時代が今日に近ければ近いほど，彼の視力は，暗い瞼で曇ってしまう」。これは，彼が古代史が得意だったことと，臨時政府の中で，右往左往して，巧く支配したり，上手く，的確な指導や助言を与えることができなかったことを言っているらしい。

保守派からは，凶暴な共和派，民主主義派，革命派の不逞な輩，チャルトルィスキ首班の命を狙う男，８月15日の血まみれの夜の張本人，と酷評された。たとえば，カイェタン・コジミャンは，「ヨアヒム・レレーヴェルのお陰で，11月29日からのことはすべて起こったのだ。あいつがいなければ，何も起こらなかったのだ。外ならぬあいつだけが自分の祖国に，９カ月も悪魔のように纏わり付き，苦しめ，責め苛み，我が国の歴史上例を見ない最悪の自殺へと導いたのだ」，と書いている。

結局のところレレーヴェルの歴史哲学，歴史観を継いでいったのは，民族解放運動などに積極的に参加していった人々，すなわちイェンジェイ・モラチェフスキ（1802-55），ヘンリク・シュミット（1817-83），カロル・シャイノハ（1818-68）などの人々だったのである。

なぜ彼らがレレーヴェルの法統を継いでいったかといえば，まず第一に，彼らすべてがアンガージュマン的，政治参加的，愛国主義的歴史を信奉する代表者たちであり，歴史に対して「過去の科学」や，文芸的おしゃべり的お話を期待していたのではなく，民族の使命を期待し

ていたからである。この課題遂行のためには，骨董品的，冷たい，「中立的」歴史記述では不十分であった。細かなディテール，三流史実の確定や解釈にのみ捉われてはならず，ポーランドの歩んだ道の全体像，その生と発展の全面像や歴史の「精神」を示さなければならないからである。モラチェフスキらは，この点で，レレーヴェルを高く評価した。

また第二に，弟子たちは皆，古き良き士族共和制に魅力を感じていた。特にその共和制的，自由の制度に感じ入っていた。彼らはこの共和制の原則を，スラヴの原始的な「精神」，つまり前述の guminowładztwo（民権，ゲマインシャフト権力）の「精神」から抽出してきた。しかしながら，彼らはポーランドが共和制から逸脱したこと，政治的権力がひとつの階級に限られていたこと，人民が迫害されていたことを批判していたことは勿論である。もっともこれらの「悪」は，すべて外国から齎されたものである，としたのであるが。彼らはまたシュラフタの民主制，市民的自由，国王選挙制，他民族との兄弟的結合様式としてのポーランドとリトワニアの合同，国会，地方議会などを称賛した。つまりこれらの制度，習慣の中に深くスラヴの伝統を見て取ったのだ。

こうした見解によれば，ポーランドは固有な体制を建設し，ジェチポスポリタ（ポーランド共和制体）に他国を加える過程で，この固有な体制を他の国々に押し広め普遍化する使命を果たしたのだ。モラチェフスキは，『ポーランド国民性，その基盤，歴史的発展』(1862）で次のようにポーランドの民族性について書いているが，これらはレレーヴェルを中心とする人々の間で共通認識となっていたであろう。「ポーランドの少なくともシュラフタの間で，ドイツ民族とモンゴル人に対し，スラヴ的エレメント，要素が保存され，これが素晴らしい民族的美徳，すなわち兄弟愛，犠牲的精神，自由への愛着，他民族への思いやり，自由愛好，隣人への文明拡大への趣向を生み出したのである」。(12，74)

フランス革命は全世界に向かって自由，平等，博愛を高らかに唱導した。1830-31年のポーランドにおける蜂起・反乱は「独立，統一，自由，博愛，平等」をそのスローガンとした。ここで独立とは，いわゆる1772年の国境を基準とするポーランドの政治的独立の回復のことであり，従って統一とは，現在のポーランド領域だけでなく，リトワニア，ベラルーシ，ウクライナの一部等々を含み，たとえば，いまでは所在のはっきりしない，ルテニア人などの民族をも含んだ多民族複合国家の統一だったのである。レレーヴェルの構想していた国家の統一もまさにそれであった。

フランス革命とナポレオンによる全ヨーロッパの征服は，あらゆる価値観の転換，民族の歴史的過去との断絶を含む変革を各国に迫った。レレーヴェルとは，結局のところ，この時期にポーランドに現れ，政治意識に富んだロマンチック・ナショナリストとしての一生を終えた歴史家にして政治活動家と言って良いだろう。

◆注は煩雑になることを避け，参考文献の番号とページ数のみ本文中に括弧内に表記する。

◆主要参考文献一覧

1．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅰ, Warszawa, 1961.
2．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅱ, Warszawa, 1964.

3．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅲ, Warszawa, 1959.
4．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅳ, Warszawa, 1966.
5．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅴ, Warszawa, 1972.
6．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅷ, Warszawa, 1961.
7．J. Lelewel, Dzieła, t. Ⅹ, Warszawa, 1969.
8．H.Więckowska, Listy emigracyjne Joachima Lelewela, Kraków, 1948-56.
9．A.Mickiewicz, Dzieła, t. Ⅰ, Warszawa, 1955.
10．S.Wyspiański, Dzieła, t.Ⅲ, Biblioteka Polska, Warszawa, 1926.
11．M.H.Serejski, Przeszłość i teraźniejszość, Wrocław, 1965.
12．M.H.Serejski, Joachim Lelewel i jego szkoła, w: Polska mysł filozoficzna i społeczna, Warszawa, 1973.
13．J.S.Skurnowicz, The Polish National Idea in the life and works of Joachim Lelewel. Univ. of Wisconsin, Ph.D., 1972.
14．W.Weintraub, The Poetry of Adam Mickiewicz, Leiden, 1954.
15．J.Zdrada, Joachim Lelewel o początkach cenzury w Królestwie Polskim, Przegląd Historyczny, LIX. 1968.
16．Z.Sudolski, Adam Mickiewicz Opowieść biograficzna, Anchor, Warszawa, 1996.
17．J.Lukasiewicz, Mickiewicz, Wyd.Dolnośląskie, Wrocław, 1997.
18．T.Krzywicki, Szlakiem Adama Mickiewicza, Rewasz, Pruszków, 1998.
19．O.Orlik, Dekabristy i evropejskoe osvoboditelinoe dvizhenie, Mysli, M., 1975.
20．W.Langer, Political and Social Upheaval: 1832-1854.New York: Harper and Row, 1969.
21．W.H.Zawadzki, A man of Honour. Adam Czartoryski as a Statesman of Russia and Poland 1795-1831.Clarendon Press, Oxford, 1993.
22．M.Malia, Russia under western eyes.Harvard Univ.Press, 1999.
23．I.Chrzanowski, Optimizm i pesymizm polski.PWN., W-wa, 1971.
24．ブルクハルト，柴田治三郎訳，『イタリア・ルネサンスの文化』，中央公論社，1966。
25．中山昭吉，『近代ヨーロッパと東欧』，ミネルヴァ書房，1991。
26．岩波講座，『世界歴史30別巻』，岩波書店，1971。
27．土谷直人，『ポーランド・ロマン主義――スウォヴァツキを中心に――』，こもるか出版，2002。